

# 令和8年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和8年6月30日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表は令和8年7月28日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇秋田県では「秋田県総合防除計画」を策定し、化学農薬のみに依存しない総合防除を推進しています。病虫害を防除する場合は、本計画を参照し総合防除に取り組んでください。本計画は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所  
トップページ

## I. 予報の要点

水 稲	葉いもちの全般発生開始期は早いと予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や感染苗の持ち込みからの伝染を確認した場合は、速やかに防除してください。 斑点米カメムシ類の発生量はやや多いと予想されます。防除対策情報第5号を参照し、農道・畦畔、休耕田などの除草を徹底してください。
大 豆	食葉性鱗翅目幼虫の発生量がやや多いと予想されます。防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）に防除してください。
野 菜	病害では、ねぎ、きゅうりのべと病が多いと予想されます。発病を確認した場合は治療効果のある薬剤を葉の全体にかかるように散布してください。 害虫では、ねぎのネギハモグリバエ、トマトのアザミウマ類、野菜・花き共通のオオタバコガが多いと予想されます。発生初期から防除してください。
花 き	害虫ではきくのハダニ類が多いと予想されます。発生が見られたら薬剤を散布し、密度の低下を図ってください。
果 樹	りんごでは、果樹カメムシ類の発生量が多いと予想されます。成虫が次々に飛来し、果実被害が懸念される場合は、防除対策情報第4号を参照して防除を徹底してください。

## II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全県	早い	—	平年並
	紋枯病	全県	やや早い	—	多い
	稲こうじ病	全県	—	—	やや少ない
	斑点米カメムシ類 (第2世代) (アカスジカスミカメ)	全県	早い	やや多い	やや多い
	(アカヒゲホソミドリカスミカメ)		早い	平年並	平年並
コバネイナゴ	全県	—	平年並	やや多い	
大 豆	ウコンノメイガ	全県	平年並	—	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	やや多い
ねぎ (夏どり)	さび病	全県	—	平年並	やや少ない
	べと病	全県	—	多い	多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや多い	多い
きゅうり	べと病	全県	—	多い	多い
	うどんこ病	全県	—	平年並	やや多い
	斑点細菌病	全県	—	平年並	やや多い
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	少ない	やや少ない
キャベツ (初夏どり)	コナガ	全県	—	やや多い	やや多い
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	やや多い
	ヨトウガ (第1世代)	全県	—	平年並	やや多い
トマト	葉かび病	全県	—	平年並	平年並
	すすかび病	全県	—	平年並	平年並
	灰色かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
	トマトキバガ	全県	—	—	平年並
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	やや多い
きく	白さび病	全県	—	平年並	平年並
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	やや少ない	平年並
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ、 ミカンキイロアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、カンザワハダニ)	全県	—	多い	多い
りんどう	葉枯病	全県	—	平年並	平年並
	リンドウホソハマキ	全県	—	平年並	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ)	全県	—	平年並	やや多い
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	—	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	—	多い	多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	—	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	多い
	キンモンホソガ (第2世代)	全県	—	平年並	多い
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	—	平年並
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	少ない	平年並
ぶどう	べと病	県南部	平年並	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	平年並	平年並
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並
	アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	県南部	—	やや少ない	平年並
	クビアカスカシバ	県南部	—	—	やや多い
飼料作物	アワヨトウ (第1世代幼虫)	全県	—	やや少ない	やや少ない

### Ⅲ. 発生予報と防除対策

#### A 水稲

病虫害名	予報内容	
	発生時期（全般発生開始期）	発生量
1 いもち病（葉いもち）	早い（前年よりやや早い）	平年並 （前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。
- イ B L A S T A M法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、6月21～23日及び26～27日に感染好適な気象条件が見られている（-/+）。
- ウ 6月3～4半旬の余り苗調査（69地点）における発病地点率は0%（平年3.4%）でやや低かった（-/ー）。
- エ 病斑増加状況調査では、6月25日までに病斑増加は認められていない（±/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。
- イ 余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意する。
- ウ 余り苗や本田に持ち込まれた発病苗からの伝染を確認した場合は、速やかな防除対策を実施する。これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤（2kg/10a）と、ブラシン剤又はノンプラス剤を併用し、その後必要に応じてビーム剤を追加散布する。葉いもち防除剤を使用した場合でも、持ち込みによる発病ほ場では防除効果が十分に発揮されないため、病斑を発見した時には直ちにブラシン剤又はノンプラス剤を併用し、その後必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 紋枯病	やや早い（-）	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（/±）。
- ウ 作況ニュース第4号によると、6月25日現在のあきたこまちの茎数は多い（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように散布する。
- イ 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使用していないほ場に限る。モンガリット粒剤は出穂20～10日前、リンパー粒剤は出穂15～5日前に散布する。
- ウ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れしない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3 稲こうじ病	—	やや少ない (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される ( /—)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- イ ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- ウ Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する。
- エ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 斑点米カメムシ類 (第2世代)	早い (前年並)	やや多い (前年より多い)
(アカスジカスミカメ)	早い (前年並)	平年並 (前年よりやや多い)
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)	早い (前年並)	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/±)。
- イ 牧草地すくい取り調査 (3地点) における越冬世代成虫の平均初確認日は、アカスジカスミカメ (以下、アカスジ) が5月29日 (平年6月7日)、アカヒゲホソミドリカスミカメ (以下、アカヒゲ) が5月18日 (平年5月24日) でいずれも早かった (—/ )。
- ウ 6月2～3半旬の巡回調査 (40地点) における畦畔でのアカスジのすくい取り数は1.4頭 (平年1.3頭) で平年並 ( /±)、アカヒゲのすくい取り数は0.9頭 (平年0.4頭) でやや多かった ( /+)。
- エ 予察灯調査 (5地点) における5月1半旬～6月4半旬の総誘殺数はアカスジが68頭 (平年53.8頭) で平年並 ( /±)、アカヒゲが107頭 (平年40.0頭) で多かった ( /+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月22日発表の防除対策情報第5号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 コバネイナゴ	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+)。
- イ 6月2～3半旬の抽出調査 (40地点) における畦畔のすくい取り数は3.0頭 (平年4.5頭)、発生地点率は52.5% (平年53.2%) でいずれも平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 要防除密度は株当たり0.5頭以上 (穂ばらみ期まで) であり、これは本田における20回のすく

い取りで100頭以上に相当する。要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上～下旬にトレボン粉剤DL、トレボン乳剤、トレボンEWのいずれかを畦畔を含めて散布する。

## 6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
褐色菌核病	やや早い	—	平年並	紋枯病との同時防除が可能である（モンセレン剤を除く）。
白葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	—	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	—	—	6月5半旬までに飛来は確認されていない。今後の予察情報に注意する。
セジロウンカ	—	—	—	6月28日現在、飛来は確認されていない。本種は飛来性害虫のため、今後の予察情報に注意する。
フタオビコヤガ (イネアオムシ) (第2世代)	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ (第1世代幼虫)	—	やや少ない	やや少ない	6月23日現在、飛来は確認されていない。本種は飛来性害虫のため、今後の予察情報に注意する。

## B 大豆

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 ウコンノメイガ	平年並 (—)	平年並 (前年並)

### (1) 予報の根拠

ア 予察灯調査（5地点）において、6月4半旬までに誘殺は確認されていない（±/ ）。

イ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア 生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。

イ 7月6半旬にほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンプロアブル5のいずれかを散布する。

ウ 発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であり、急激に発生量が増加する場合がありますので、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は2.6%（平年7.6%）でやや低く、食害茎率は28.2%（平年25.7%）で平年並だった（ /±）。
- ウ 予察灯調査（5地点）における5月1半旬～6月4半旬のツメクサガの総誘殺数は3頭（平年1.6頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

## C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 さび病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。
- イ 6月4～5半旬の巡回調査における発病株率は2.6%（平年1.6%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早まるので、予防や発病初期の防除に努める。
- イ 発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（同：3）、カナメフロアブル（同：7）などを散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 べと病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月4～5半旬の巡回調査における発病株率は8.4%（平年1.2%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月25日発表の防除対策情報第6号を参照し、防除対策を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 6月4～5半旬の巡回調査における食害株率は9.8%（平年13.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル/アベンジャーフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 ネギハモグリバエ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 6月4～5半旬の巡回調査における食害株率は5.5%（平年3.1%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターSE（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロツ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

5 その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
アブラムシ類 （ネギアブラムシ）	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。

## D きゅうり

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 べと病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 6月4半旬の巡回調査における発病株率は4.0%（平年0.7%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 敷きわらなどを行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。

- イ 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
- エ 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などの治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- オ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 うどんこ病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシシンAL水和剤（同：19）などの治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- イ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 斑点細菌病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 6月4半旬の巡回調査における発病株率は4.2%（平年3.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 強風などにより傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。
- イ 過剰な追肥をしない。また、過繁茂を避け、通風を改善する。
- ウ 発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- エ 銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。
- オ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	—	やや少ない （前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ 6月4半旬の巡回調査における発生株率は6.6%（平成17.6%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ほ場周辺の除草を徹底する。

イ ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

ウ 定期的にモスピラン顆粒水溶剤（RACコード：4A）、コルト顆粒水和剤（同：9B）などを茎葉散布する。

エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

## E キャベツ（初夏どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 コナガ	-	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 能代市防除適期決定ほのフェロモントラップにおける6月1～4半旬の誘殺数は46頭（平成147.9頭）で少なかった（ /-）。

ウ 6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭（平成0.0頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が見られる場合は、収穫前日数に注意してアフーム乳剤（RACコード：6）、ディアナSC（同：5）、フィールドマストフロアブル（同：4E）、プレバソソフロアブル5（同：28）、プロフレアSC（同：30）などを散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ 薬剤は葉裏に十分付着するよう散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 モンシロチョウ	-	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平成0頭）で平成並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 ヨトウガ（第1世代）	-	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平成0頭）で平成並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

## F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	—	平年並（前年よりやや多い）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（RACコード：10・1）、ダコニール1000（同：M5）、ベルクート水和剤（同：M7）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からダコニール1000（RACコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：10・1）、ファンベル顆粒水和剤（同：11・M7）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	—	やや少ない（前年並）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.4%）でやや低かった（ /—）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（RACコード：10・1）、ロブラール水和剤（同：2）、ベルクート水和剤（同：M7）、ミギワ10フロアブル（同：52）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、2、11、12、52の薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選定に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	—	多い(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている( /+ )。
- イ 北秋田市防除適期決定ほにおける6月1～4半旬の青色粘着板への誘殺数は177頭( 107.9頭) でやや多かった( /+ )。
- ウ 6月中旬の巡回調査における被害果率は0.0%( 0.1%) で前年並だった( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ ベストガード水溶剤(RACコード:4A)、スピノエース顆粒水和剤(同:5)、マッチ乳剤(同:15)などを花房に付着するように丁寧に散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 トマトキバガ	—	前年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている( /+ )。
- イ 防除適期決定ほ(3地点)における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は10頭( 38.5頭) でやや少なかった( /- )。
- ウ 6月中旬の巡回調査における食害株率、被害果率はともに0%だった。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 施設栽培では開口部に防虫ネット(目合い0.8～1mm以下)を設置し、本虫の施設内への侵入を防ぐ。
- イ 食害された葉や果実などはほ場内に放置せず、土中深く埋没するか、ビニル袋などに入れて密閉して本虫を死滅させた後、適切に処分する。
- ウ 本虫は繁殖能力が高いため発生が見られた場合は、直ちにディアナSC(RACコード:5)、アフーム乳剤(同:6)、エスマルクDF(同:11A)、ヨーバルフロアブル(同:28)、グレーシア乳剤(同:30)などを茎葉散布する。
- エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
疫病	—	前年並	前年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

## G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 食葉性鱗翅目幼虫	—	やや多い (前年よりやや多い)

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。
- イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は2.6% (平年7.6%) でやや低く、食害茎率は28.2% (平年25.7%) で平年並だった ( /±)。
- ウ 予察灯 (5地点) における5月1半旬～6月4半旬のツメクサガの総誘殺数は3頭 (平年1.6頭) でやや多かった ( /+)。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期 (若齢期) にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアSC、ヨーバルフロアブルのいずれかを散布する。

## H きく

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 白さび病	—	平年並 (前年並)

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病葉率は0% (平年0.0%) で平年並だった ( /±)。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。
- イ 発生してからでは防除が困難であるため、発生前からダコニール1000 (RACコード:M5)、カナメフロアブル (同:7)、ラリー乳剤 (同:3)などを散布する。また、降雨などで発病が多くなると予想される場合は、3～4日間隔で散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	平年並 (前年よりやや多い)

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている ( /+)。
- イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は0% (平年4.5%) でやや少なかった ( /-)。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するため、発生初期の防除を徹底する。
- ウ 発生初期から、ダントツ水溶剤 (RACコード:4A)、チェス水和剤 (同:9B)、トランスフォームフロアブル (同:4C)などを散布する。
- エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ、 ミカンキイロアザミウマ)	—	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている ( /+ )。
- イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は2.1% (平年1.7%) で平年並だった ( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ 発生初期から、グレースシア乳剤 (RACコード:30)、スピノエース顆粒水和剤 (同:5)、  
ファインセーブフロアブル/アベンジャーフロアブル (同:34)などを散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ハダニ類 (ナミハダニ、カンザワハダニ)	—	多い (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている ( /+ )。
- イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は2.2% (平年0%) で高かった ( /+ )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ 発生初期から、グレースシア乳剤 (RACコード:30)、コテツフロアブル (同:13)、スター  
マイトフロアブル (同:25A)などを散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

## I りんどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉枯病	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /± )。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病茎率は10.3% (平年12.0%) で平年並だった ( /± )。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。
- イ オンリーワンフロアブル、チオノックフロアブルなどの薬剤で防除するが、花の汚れを避ける  
ためにオーソサイド水和剤80やZボルドーは着蕾期以降に使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 リンドウホソハマキ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 6月中旬の巡回調査における被害茎率は0.2%（平年0.2%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。

イ ほ場をよく観察し、成虫、潜葉痕又は食害痕が認められたら、直ちにアディオフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤などの薬剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ハダニ類（ナミハダニ）	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は0.6%（平年1.1%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア カネマイトフロアブル（RACコード：20B）、グレーシア乳剤（同：30）、コロマイト水和剤（同：6）などを散布する。ただし、マイトコーネフロアブル（同：20D）の使用時期は開花前までのため注意する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

## J 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（3地点）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は31頭（平年12.0頭）でやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の発生状況をよく確認し、被害部位がある場合は幼虫が近くに潜んでいるので捕殺する。

イ 施設栽培では、開口部全てに防虫ネット（目合い4mm以下）を設置し、本虫の施設内への侵入を防ぐ。

ウ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するので若齢期のうちに防除を徹底する。

## K りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	—	多い（前年より多い）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.5%（平年0.1%）で高く、同地点率は30.0%（平年17.6%）でやや高かった（ /+）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 7月上旬にパスポート顆粒水和剤など、7月下旬にダイパワー水和剤などを散布する。
- イ ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を使用する場合は保護殺菌剤に加用し散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、他の防除時期を含め使用回数は1回とする。
- ウ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	—	やや少ない （前年より少ない）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病果そう率は0%（平年1.3%）、発病果率は0%（平年0.1%）でいずれもやや低かった（ /-）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病葉、発病果は見つけ次第、摘み取り、焼却する。
- イ 7月上旬にパスポート顆粒水和剤など、7月下旬にダイパワー水和剤などを散布する。
- ウ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）に加用する。
- エ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

- ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。
- イ 被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。
- ウ 薬剤は約2週間間隔で散布するが、果実感染は6～7月が主体となるので、この期間が多雨と予想される場合は、散布間隔を短くする。

エ QoI 剤（RACコード：11）は原則、使用回数を2回以内とし、加用する保護殺菌剤はドキリンフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤などを使用する。

オ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 枝への感染は7月に多いため、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。  
イ 薬剤は約2週間間隔で散布するが、果実感染は6～7月が主体となるので、この期間が多雨の場合は、散布間隔を短くする。

ウ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 褐斑病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 6月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.1%（平年0.0%）で平年並、同地点率は5.0%（平年2.4%）でやや高かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 密植や枝が重なった部分などに多発するので、不要な徒長枝を除去する。

イ 薬剤は約2週間間隔で散布するが、天候不順で冷涼、多雨が続く場合は散布間隔を短くする。

ウ 多発が予想される場合は、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）又はオンリーワンフロアブル（同：3）を保護殺菌剤に加用し散布する。

エ DMI 剤耐性菌が確認されている地域及びりんご黒星病防除にDMI 剤（RACコード：3）を使用した園地では、褐斑病の防除にはDMI 剤を使用しない。

オ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 前年収穫期の発生量から越冬量は平年並と推定されている（ /±）。

イ 防除適期決定ほ（4地点）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は

45頭（平年36.2頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。被害果の摘み取り及び水漬け処分は幼虫脱出前の7月上旬まで全園地一斉に行い、その後は随時行う。
- イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを卵期間内に散布する。
- ウ パーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.01頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。
- ウ エコマイト顆粒水和剤とダニゲッターフロアブルは、作用点が同一であるため、いずれか1回の使用とする。
- エ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。
- オ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。
  - ① コロマイト乳剤は、パスポート顆粒水和剤及びストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
  - ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
  - ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
  - ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
  - ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
  - ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（4地点）における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は142頭（平年134.3頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月3日発表の防除対策情報第4号を参照して防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
9 キンモンホソガ（第2世代）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月中旬の巡回調査における食害葉率は0.0%（平年0.1%）で低く、同地点率は15.0%（平年18.7%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。
- イ 発生が多い園地では、7月上旬にピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを散布する。

10 その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	—	やや多い	やや多い	他害虫との同時防除に努める。

## L なし（日本なし）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 黒星病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 潟上市予察ほにおける6月中旬の発病果そう葉率は94.9%（平年41.2%）で高かった（ /+）。
- ウ 6月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は0%（平年0.1%）、同地点率は0%（平年14.7%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。
- イ オキシラン水和剤（RACコード：M4・M1）、オーソサイド水和剤80（同：M4）などを10日間隔で散布する。
- ウ 多発条件下での散布間隔は7日とする。幸水は果実発病が多いので特に注意し、7月末まで念入りに防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 潟上市予察ほにおける6月中旬の発病果そう葉率は13.3%（平年6.6%）で高かった（ /+）。

ウ 6月中旬の巡回調査における発病果そう葉率は0.0%（平年0.4%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。

イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、適切に処分する。

ウ 落花期から袋かけまでが果実感染防止の重点時期であるため、薬剤散布後は袋かけが遅れないようにする。

エ オキシラン水和剤（RACコード：M4・M1）を10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合又は発病している園地では散布間隔を7日とする。

オ 多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）を保護殺菌剤に加用して散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシ剤の使用回数は3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。

イ キャプレート水和剤（RACコード：M4・1）、オキシラン水和剤（同：M4・M1）、オーソサイド水和剤80（同：M4）を10日間隔で散布する。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 前年収穫期の発生量から越冬量は平年並と推定されている（ /±）。

イ 防除適期決定ほ（3地点）における6月1～4半月のフェロモントラップへの誘殺数の合計は17頭（平年22.7頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。被害果の摘み取り及び水漬け処分は幼虫脱出前の7月上旬まで全園一斉に行い、その後は随時行う。

- イ プレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などを卵期間内に散布する。
- ウ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。
- エ スミチオン水和剤40とパーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 徒長枝の切除、焼却を行い、夏期の発生源を少なくする。
- イ カネマイトフロアブル（RACコード：20B）、ダニオーテフロアブル（同：33）、ダニゲッターフロアブル（同：23）、マイトコーネフロアブル（同：20D）などを散布する。ただし、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。
- エ イの薬剤を使用する際は、次の点に注意する。
  - ① ダニゲッターフロアブルは、新梢伸長期の豊水、新高、長十郎で新葉に薬害（葉焼け、縮葉症状）を生じるおそれがあるので、これらの品種に散布する場合は7月下旬以降に使用する。
  - ② ダニゲッターフロアブルは、新梢伸長期の日本なしで有機リン系剤との混用又は10日以内の近接散布で新葉に薬害（葉焼け、縮葉症状）を生じるおそれがあるので散布しない。
  - ③ ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下）。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（3地点）における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は2頭（平年127.9頭）で少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月3日発表の防除対策情報第4号を参照して防除する。

## M ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	平年並（前年より遅い）	平年並（前年並）

### (1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ 6月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア ベと病は雨滴のはね上がりで伝搬するので、敷きわらを厚く敷いておくと効果的である。

イ エトフィンフロアブル（RACコード：22）、ジャストフィットフロアブル（同：43・40）、フェスティバル水和剤（同：40）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、ライメイフロアブル（同：21）、ランマンフロアブル（同：21）、レーバスフロアブル（同：40）、銅剤（コサイド3000、ムッシュボルドーDF、ICボルドー66D、Zボルドーなど）（同：M1）又は4-4式ボルドー液のいずれかを散布する。

ウ 耐性菌の出現を回避するため、QoI剤（RACコード：11）、QiI剤（同：21）、CAA剤（同：40）、シモキサニル（同：27）を含む薬剤及びエトフィンフロアブル（同：22）の使用は1～2回とし、同一RACコードの薬剤を連用しない。特に、QoI剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除薬剤として使用しない。

エ ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドーなど）は袋かけ後に使用する。

ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 灰色かび病	—	平年並（前年よりやや少ない）

### (1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.1%（平年0.2%）で平年並だった（ /±）。

### (2) 防除上注意すべき事項

ア 花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。

イ 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるので焼却するなど適切に処分する。

ウ オーツサイド水和剤80（RACコード：M4）、オンリーワンフロアブル（同：3）、パスワード顆粒水和剤（同：17）、ピクシオDF（同：17）のいずれかを散布する。ただし、オーツサイド水和剤80の使用時期は収穫30日前までであるため、散布時期に注意する。また、オンリーワンフロアブルの散布時期は7月中旬までとする。

エ 上記薬剤のうちオーツサイド水和剤80以外の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用は1回とし、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 晩腐病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている ( /±)。

イ 開花前の巡回調査における発病花穂率は0% (平年0.0%) で平年並だった ( /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

イ 笠かけ、袋かけは発病抑制効果が高いので、できるだけ早く始め、遅くとも7月中旬までには終わる。

ウ オートサイド水和剤80 1,000倍 (RACコード:M4) 又はオンリーワンフロアブル2,000倍液 (同:3) を散布する。ただし、オートサイド水和剤80の使用時期は、収穫30日前までなので注意する。オンリーワンフロアブルは、耐性菌の出現を回避するため使用は1~2回とし、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+)。

イ 6月中旬の巡回調査における被害花穂・果房率は0% (平年0%) で平年並だった ( /±)。

ウ 防除適期決定ほ (2地点) における6月1~4半旬の黄色粘着板への誘殺数の合計は2頭 (平年7.2頭) でやや少なかった ( /-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が見られたら、グレーシアフロアブル (RACコード:30)、ディアナWDG (同:5)、テッパン液剤 (同:28)、ピレスロイド系剤 (スカウトフロアブル、バイスロイドEWなど) (同:3A)、ネオニコチノイド系剤 (ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤など) (同:4A) を散布する。なお、バイスロイドEWは小粒種ぶどうに登録がなく、大粒種ぶどうでのみ使用できる。

イ グレーシアフロアブル、ダントツ水溶剤は小豆大以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大以降の散布で果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、その前又は袋かけ以降に使用する。

ウ エクシレルSEは果実に葉斑や果粉の溶脱を起こすおそれがあるので、袋かけ後に使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 クビアカスカシバ	—	やや多い (—)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている ( /+)。

イ 防除適期決定ほ (2地点) における6月1~4半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は

112頭（平年156.9頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 以前に本虫による被害を受けた部分や根頭がんしゅ病の発病部分で被害が多いため、食入部から排出される虫糞を目印にして、幼虫を早期に発見して捕殺する。

イ 粗皮剥ぎを行ってから薬剤散布する。

ウ スピードスプレーヤでテッパン液剤又はフェニックスフロアブルを散布する場合は、枝幹に十分に薬液がかかるように散布する。

エ テッパン液剤又はフェニックスフロアブル散布後も虫糞排出が認められる場合は、ロビンフッドを食入孔へ処理する。幼虫に薬液が到達するよう、粗皮を剥ぎ、虫糞を除去して食入孔の向きを確認してから噴射する。

## N 飼料作物

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 アワヨトウ（第1世代幼虫）	—	やや少ない（—）

(1) 予報の根拠

ア 糖蜜トラップ（2地点）における侵入世代の6月5半旬までの総誘殺数は0頭（平年6.2頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

## IV. 気象予報

令和8年6月25日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月27日～7月26日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

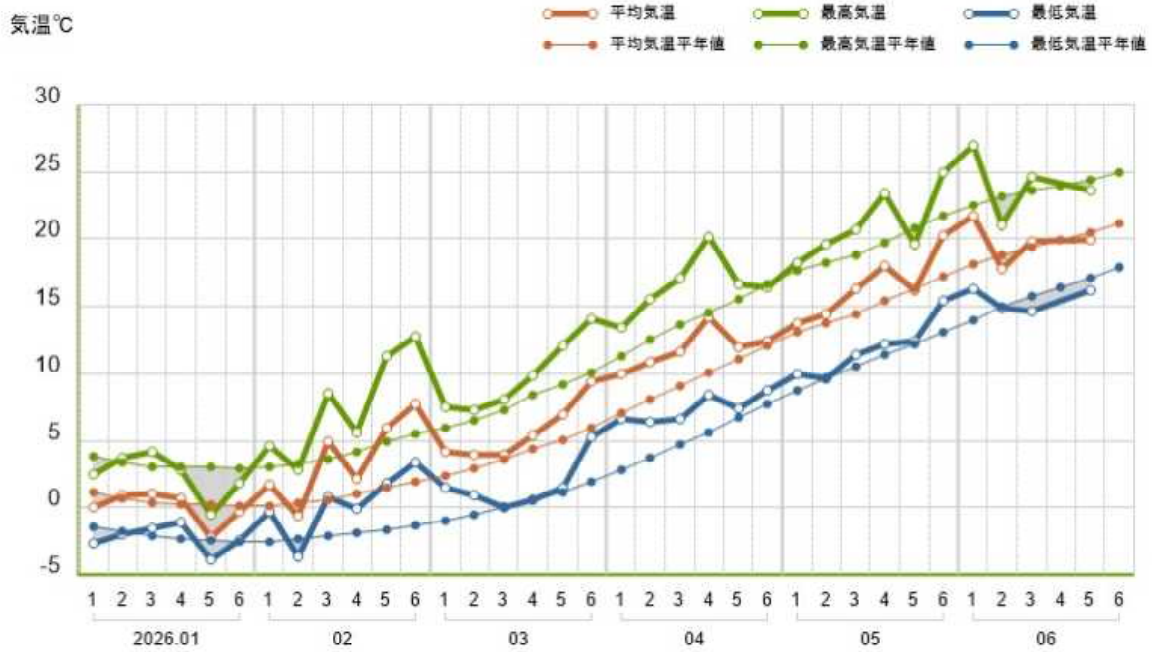
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

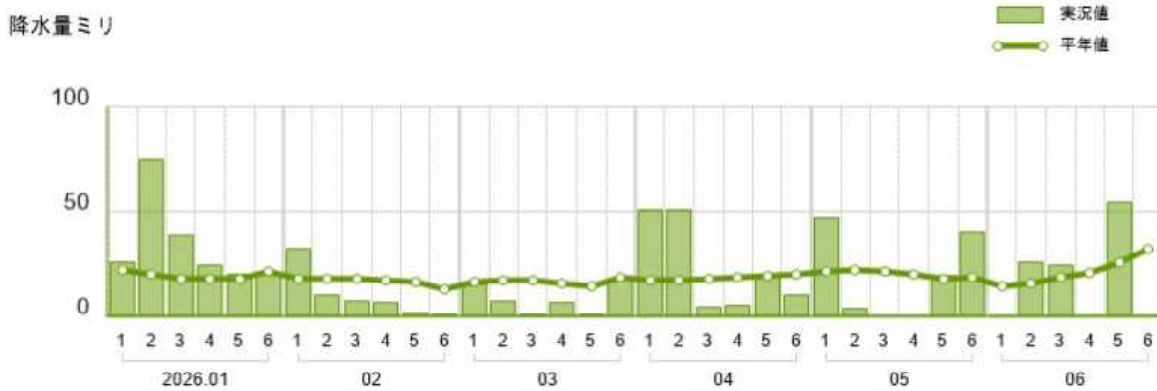
	低い	平年並	高い
6/27～7/3（1週目）	20%	40%	40%
7/4～7/10（2週目）	20%	30%	50%
7/11～7/24（3～4週目）	20%	30%	50%

## V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月5半旬 秋田県農業気象システムより)

### 気温の推移



### 降水量の推移



### 日照時間の推移



## VI. 用語の説明

### 発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

### 発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

### 予報内容の「-」

予報内容の発生時期や発生量の「-」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、又は、発生時期や発生量が不明なことを示します。

### 予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「-」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「-」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

### 気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40%で高い（多い）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

### 半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

令和8年度秋田県農薬危害防止運動  
～農薬を安全に正しく使いましょう！～

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。  
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

# 農薬の適正使用を徹底しましょう!

農薬の使用にあたっては、十分な注意が必要です。

**1 農薬に過度に頼らない防除を心がけましょう!**

健全な種苗や抵抗性品種の使用、防虫ネットや粘着板の設置、マルチによる抑草等、農薬に過度に頼らない防除を積極的に行いましょう。

**2 使用前には必ずラベルを確認しましょう!**

農薬のラベルに記載されている使用基準は必ず守らなければなりません。使い慣れた農薬でも使う前に必ずラベルを確認しましょう。

〇〇××フロアブル		農林水産省登録第△△△△号				
作物名	有効成分	使用回数	使用回数	本剤の 使用回数	使用回数	〇〇〇〇号 を含む農薬の 使用回数
トマト	アブメイト	2,000回	※1 ※2	収穫前日 まで	2回以内	150-200回/10ha 3回以内
トマト	ハダコ	1,000-1,500回		収穫14日前 まで	2回以内	200-300回/10ha 3回以内

対象となる病害虫です。

記載されている方法以外では使用できません。

この回数を超えてこの農薬を使用できません。

記載されている濃度の範囲内で散布しましょう。

登録番号が記載されている登録農薬を使用しましょう。

使用できる作物です。記載されていない作物には使用できません。

記載されている希釈回数より奥濃度では使用できません。

使用できる時期です。記載されている時期以外には使用できません。

「〇〇〇〇」には有効成分名が書かれており、この成分を含む農薬は総使用回数を超えて使用できません。商品名が違っていても同じ成分を含む農薬があるので注意が必要です。

秋田県農林水産部



### 3 農薬の飛散(ドリフト)・危害防止の徹底を!

- ① 農薬を散布する場合は、周辺の住宅地や農作物に配慮し、事前に近隣住民等に知らせるようにしましょう。
- ② 風がない又は弱いときに散布し、風速が概ね3m/秒を超えたら直ちに散布をやめましょう。
- ③ 散布位置や散布方向に、他の農作物等がないことを確認し、散布の際は適正なノズルと圧力で行いましょう。
- ④ 養蜂が行われている地区で殺虫剤を散布する際には、養蜂業者と連携をとり、早朝又は夕刻に散布する等、ミツバチへの危害防止を徹底しましょう。
- ⑤ 農薬使用の際は適切な防護装備の着用を徹底しましょう。
- ⑥ その日のうちに農薬散布の内容を記録しましょう。

### 4 空中散布を行う際は適切な手続きを!

- ① ドローンや無人ヘリコプターで農薬散布する際は、機体の登録、飛行許可・承認取得等、所定の手続きを行いましょう。
- ② ドリフトや墜落等の事故が発生した場合は早急に報告してください。

### 5 農薬使用後は適切な方法で後片付けを!

- ① 使用後の噴霧機やタンク、ホース、ノズル等の散布器具はしっかりと洗いましょう。(洗浄液は排水路や河川等に流してはいけません。)
- ② 使用済み容器の中には農薬が残らないようにし、産業廃棄物処理業者に委託する等、適正に処分しましょう。  
(市町村や地域等が回収・処分している場合は、そのルールに従いましょう。)
- ③ 余った農薬は、別容器に移し替えたりせず、施設された場所に保管する等、保管管理を徹底しましょう。

～お問い合わせは、水田総合利用課、病害虫防除所又はお近くの地域振興局農林部 まで～

秋田県水田総合利用課 TEL 018(860)1785 FAX 018(860)3898  
 秋田県病害虫防除所 TEL 018(881)3660 FAX 018(886)3566



#### 問合せ先

秋田県病害虫防除所	TEL 018-881-3660	秋田県果樹試験場	TEL 0182-25-4224
秋田県農業試験場	TEL 018-881-3326	かづの果樹センター	TEL 0186-25-3231
		天王分場チーム	TEL 018-878-2251